

Germination

若手のページ

博士課程に進学すると就職できないの？

大津 厳生



私は二度就職し現在任期付きの助教をしている。一度目は修士修了後、エバラ食品工業㈱に入社するも3年で退社し、博士課程に進学した。今から振り返るとよく博士課程へ進学を決断したと思う。因みに、この時嫁も子供も一人いた。その分研究に対して新たな視点を持つことができたのかもしれない。ともあれ博士3年の2月頃にリクナビからエントリーした、㈱島津製作所から6月頃に内定を頂けた。実はこの時、学位取得要件を満たしておらず必死だったのを思い出す。博士号取得要件を満たす原著論文が採択されたのは、D3の10月であった。めでたく3年で博士号を取得でき、晴れて二度目の就職を決めたのだが3年で退社し、現在に至っている。博士号を取得してからビジネスの方面に進む、という選択(キャリアパス)について紹介したい。

『覚悟』

『好きな研究、それ以外のことを放下』する我慢は必要である。最近はこの覚悟がなく進学してくる学生が多く、当然ながら実験量も少ない。博士号取得を目指す皆さんへこの『覚悟』を持ってほしい。『必ず道は開かれている』と私は思う。

『真のスキル』

アカデミックポストに就く場合は業績が何といっても重視されるだろうが、企業への就職を考える場合、業績とは異なった『真のスキル』を博士課程でいかに身に付けているかがキーとなってくるだろう。

博士課程の就職活動では悲観的な話をよく耳にするかもしれない。博士の学生を積極的に取る会社が少ないのも事実である。しかしそういった状況の中でも、きちんとした就職活動をおこなえば博士の学生でも就職できる。はっきり言ってしまえば、博士課程の学生は就職活動が下手なだけである。本来、勉強して就職できないはずはない。

『5年分のアドバンテージ』

企業は博士の学生にどのような資質を求めているのだろうか。10年ぐらい前の民間企業の研究活動に関する調査報告では、専門知識よりも、粘り強さや達成意欲、発想の柔軟性を望んでいる企業が多かったのを覚えている。これは現在も変わっていないと私は感じる。企業がこういう資質を望んでいるのは、専門知識がいらないと

いうことではなく、研究開発の現場で通用する幅広い能力が劣りすぎているからではないだろうか。博士の学生は学部卒の社員より5年分のアドバンテージがなければ、企業が雇う理由がないのである。いかにして自分のアドバンテージを示すためのスキルを身につけるのかが重要になる。

『自立性』

企業での仕事というのは、一人では絶対にできない。だからこそ、研究を進めるにあたって『教員、修士、学部の学生を上手く使いながら、成果がきちんとトータルアップするような組織活用力』が身に備わっている学生は企業に入って伸びるし、望まれるのではないだろうか。技術者としての『自立性』を持った博士の学生かそうでないかは、企業側はしっかり見極めているように感じる。言い返せばこの点だけ意識していれば、あとは好きな研究に没頭すればよいのではないかと思う。『国際性』というスキルも有効だろう。大学・ラボ単位で多くの留学生の活躍が光る。こういった状況(風潮)も上手に活用するべきだと思う。

『あなたの研究者としての道』

『博士号取得後企業に就職』への自分なりのマイルストーンをきちんと描くこと。いつまでにどんな結果を出して、いつ学会で発表するのか。そしていつから就活をして、いつまでに原著論文を投稿し、要件を満たすのか。計画を立てよう！そして『決めたことをやる』。毎日、決めたことを実践することが大切だ。道元禅師の言葉に「大にあらず、小にあらず、自にあらず、他にあらず」とある。こだわりは意味がなく、常に自分自身が主人公であり、いまの自分自身を生かして輝かせること。自分ができることをまずやる。「早起きする」「大きな声・笑顔」「机上の整理をする」「報告をする」「準備のための準備をする」何でもいい。自分で決めたことを実践すること。毎日の実践から大きなエネルギーが生まれると思う。耐えると我慢は違う。明確な目的がなく研究をしていると、それは我慢だ。この分野で世界一になろう、と目的が明確であれば、耐えることができる。他から見てかなりキツイことでも、楽しくなるもの？

就職に直結するよう、合理的に動くこと！